ニッポン 人・脈・記
jinmyaku@asahi.com

NPO 前へ6

子どもの魂 安らげる場を

奥地圭子さん

病気などを除く理由で、学校を年に30日以上休んだ「不登校」の小中学生は、2009年度に12万人以上いた。こうした子どもたちが通う「フリースクール」は全国に数百ある。

NPO法人「東京シューレ」はその草分けとして知られる。

小学校の教員だった奥地圭子(69)は1978年、初めて不登校に直面した。小学3年生だった長男(41)が、転校をきっかけに、登校できなくなったのだ。

奥地は、長男に登校を促した。

「そろそろ行けるよね」

「……うん」

長男は学校へ行ったり休んだりを繰り返した末、5年生の秋、拒食症になった。

奥地は治療方法を探すうち、児童精神科医の渡辺位に出会う。長男と渡辺の会話は2時間も弾んだ。渡辺は長男の思いを受け止め、「学校へ行くように」とは一言も言わなかった。

帰宅後、長男は言った。

「僕は僕でよかったんだね」

その日を境に、長男は元気を取り戻した。今は大学で研究者として活躍している。

奥地は自分が学校だけを見ていたと気づき、84年、不登校の子どもがいる母親たちと「親の会」を作り、代表になった。

夜間中学の教員だった松崎運之助(65)が会の事務局長として奥地を支えた。山田洋次(79)の映画「学校」で主人公のモデルになった人物だ。

夜間中学では80年代に入り、不登校の経験がある若者が急増していた。松崎は振り返る。

「子どもたちの魂が安らげる場所が緊急に必要だった」

奥地は、学校に通っていない子どもが集える場所を作ると決め、22年間の教員生活にピリオドを打った。

85年6月、奥地は東京都北区で、雑居ビルの一室を借り、不登校の子どもたちの居場所「東京シューレ」を開いた。

「子どもたちが、学ぶ内容を自分で決める場をめざした」と奥地は言う。小学生から中学3年生まで約30人が通い始めた。

校則や評価はない。国語や数学の科目と並び、パン作りなどを経験する「やってみよう」や、やることを自分で考える「自主タイム」を設けた。登下校の時間や、出席する科目も、一人ひとりの子どもが決める。

資金や人手の不足で、やめようと思ったこともあった。

だが、「学校離れ」は続き、シューレへの通学希望者と支援者は増えていく。後に新宿区と大田区にもシューレを作った。

文部省の有識者会議は92年、不登校を「誰にでも起こりうる」とする報告書をまとめた。親の育て方や本人の性格に原因がある、という否定的な認識からの転換だった。

汐見稔幸さん

NPO法人などが運営するフリースクールは卒業証書を出せないし、私立学校のような公的助成も受けられない。それでも、学校に通えない子にとっては貴重な場所だ。そんな認識は行政にも浸透し始めている。

堂本暁子(78)は03年、千葉県知事として、不登校の子どもの居場所づくりの支援を始めた。県がNPO法人へ無料で施設を貸し、光熱費も負担する。ジャーナリストとして85年、シューレを訪れ、自由な雰囲気にひかれたのが原点だ。

東京都葛飾区では07年春、私立の「東京シューレ葛飾中」が開校した。NPO法人「東京シューレ」のメンバーらを中心にした学校法人が運営する。文部科学省から、独自のカリキュラムを認められており、制服やチャイムもない。建物は、区が空き校舎を提供してくれた。

準備の段階では、シューレの保護者の間でも賛否があった。

「これまでの授業を続けられるのなら、公的に認められた学校の方がいい」

「公教育の価値観に縛られかねない。シューレのこれまでの歩みに逆行する」

議論の末、奥地は思った。

運営するのは学校法人でもNPO法人でもかまわない。子どもたちにふさわしい選択肢があることが大事なのだ、と。

東京シューレ葛飾中を運営する学校法人の理事を務める、教育学者の汐見稔幸(63)は言う。

「いろいろな学びの場ができ、そこでの教育の中身が広く知られれば、学校の価値を、運営主体で判断しなくなる時代がやってくる」

(小室淳幸)